

思

考

の

隅

景

世界のなかの『源氏物語』

中古国文学研究の世界の外に広がる壮大な古典の宇宙

国際日本文化研究センター研究員・
総合研究大学院大学助教 稲賀繁美

北京外国語大学、日本学
 研究中心では、(昨年)11
 月23日から3日間、『源氏
 物語』を論ずる国際会議を
 開催した。開催責任者は、
 張龍妹副教授、明治書院か
 ら博士号取得論文『源氏物
 語の救済』を刊行して、本
 年の関根賞を獲得した才媛
 である。彼女の要約に従え
 ば、中国における『源氏』
 受容は三〇年代の謝逸逸に
 よる紹介を嚆矢とするが、
 八〇年代以降、大陸では豊
 子礎による訳者後記、また
 葉涇渠による前言が、解釈
 の基礎を提供している。つ
 まり、本作品は封建社会の
 腐敗と摂関政治の盛衰を描
 いたもので、貴族の退廃と
 一夫多妻に苦しむ女性の姿
 を描くことに成功し、心理
 描写に秀でるものの、叙述
 が冗長で回りくどい。女性
 の運命への同情は見られる
 けれど、男性主人公の理想
 視には貴族階級に属する作
 者の階級的限界が露呈して
 いる、といったものだ。

現在に至るまで、中国各
 地の師範大学の必須科目
 「世界文学」などでは、こ
 うした解釈が『源氏』の正
 しい理解とされている。現
 場の教師たちは、はたして
 このように「退廃的」な「好
 色文学」をいかに学生に教
 えるべきか、と苦慮してい
 る。そこには(なお)公式
 の階級史観が色濃く反映し
 ているが、それが昨今の日
 本におけるジェンダー批評
 に見られる『源氏物語』論
 と(意外な)親近性を呈し
 ているのも興味深い。現在
 『中国大百科全書』の改訂
 が進行中で、社会科学院の
 東方文学研究室が日本関係
 項目を担当すること。はた
 してどのような内容に変更
 されるものだから興味深
 いところ、とする張さんの
 控え目なコメントには、微
 妙な含著が感じられる。

中国語への最初の『源氏
 物語』の完訳は、エッセイ
 ストとして名高い、日本留

学組の文人、豊子礎(1898
 ー1975)晩年の仕事。文化
 大革命直前に、人民文学出
 版社からの依頼で翻訳に着
 手したものの、発刊は訳者
 没後の1980年から83年とな
 った。文化大革命のさなか、
 豊は失意のうちに没したと
 伝えられるが、訳稿が混乱
 期を無事生き抜いただけで
 も幸いだった。上に触れた
 豊の後記にも、時代の要諦
 の痕跡が濃厚に窺える。こ
 の間、台湾では日本文学研
 究者、林文月教授による5
 巻本が1974年から78年にか
 けて出版されている。その
 ほかに殷志俊訳と称するもの
 が、1996年遠方出版社から
 発刊されているが、これは
 豊訳を改竄したもので、殷
 という訳者も架空の人物で
 ある、と姚継中教授が内情
 暴露。また中文出身の研究
 者が、もっぱらこの豊訳に
 よって源氏物語論をなすの
 にたいして、日本留学組は
 原典を利用して日本語で論
 文を発表する機会が多い。
 双方の学術交流の欠如や発
 表媒体の違いなどに由来す
 る停滞を打破するのも、今
 回の学会のひとつの目論み
 だった。

韓国語訳については、韓
 国外国語大学の金鍾徳氏が
 報告。1975年に柳星による
 全訳(現在品切れ)また99
 年には田裕新による新訳が
 現れている。与謝野晶子訳
 を下敷きしたことも明らか
 な柳訳では、登場人物名が
 音訳されるのみで、一般の
 読者には名前の暗示する性
 格が伝わらない。田氏は高
 麗大学校を定年退職した心
 理学者とのことで、専門家
 の目から見れば誤訳も目立
 つ様子だが、一般には好評
 に受け入れられたという。

大韓民国での研究状況報
 告は、韓国放送大学の李愛
 淑氏が担当。村上春樹『ノ
 ルウェーの森』が『喪失の
 時代』との題名で爆発的な
 売れ行きを示すかたわら、
 日本の古典への関心は、一

般にも大学でも低迷してい
 る。大学での人文教育にお
 ける「古典の苦戦」の中で
 源氏研究の「盛況」は、原
 典を利用する比較的少数の
 専門家によって維持されて
 いるが、問題意識、方法論
 とも日本の研究動向に忠実
 な反面、韓国人研究者同志
 の交流が不足しているとい
 う。これは現在なお『紅樓
 夢』との類似比較といった
 研究が幅を利かせる中国と
 は対照的だ。

英語圏では、ウェイリー
 訳、サイデンステッカー訳
 に続き、今秋ロイヤル・タ
 イラーによる新訳が登場し
 た。タイラーさんは残念な
 がら今回は出席されなかつ
 たが、フランスでもルネ・
 シフェール訳に続き、アン
 ス・バイヤール=サカイを
 中心とする若手の翻訳グル
 ープが新訳に着手した。こ
 うした海外での翻訳をも視
 野に収めることの大切さは、
 シフェール訳における「草
 子地」の扱いを翻訳学から
 検討した中山真彦、空蟬の
 小桂がウェイリー訳では
 スカーフに変貌した由来を
 考察した平川祐弘両氏の
 発表も実証するところだ。

また最近現代語訳を完成
 させた瀬戸内寂聴はじめ、
 永井路子、杉本苑子、竹西
 寛子といった現代の作家が
 源氏による思いをも汲むこ
 とは、とりわけ外国の日
 本文学研究者にとっては、
 新鮮な研究の糸口ともなる
 だろう。窈窕源氏物語の橋
 本治には『源氏供養』があ
 り、河合肇雄の『紫まんだ
 ら』の光源氏中空構造説も
 意表を衝く着想だ。だがこ
 うした源氏物語世界の外が
 りは、高田佑彦氏の研究現
 状報告も示すとおり、とか
 く日本の中古国文学研究の
 視野からは脱落しがちだ。世
 界的視野から『源氏物語』
 に迫るための舞台設定の整
 備は、なお将来の課題だろ
 う。

(2001年11月末記 於北京)

思想